

の研究に待つところ大である。

地球温暖化に関連する機構は殆どが非線形の影響を持つから、地球環境問題を考える上で太陽活動の影響は周期的なものでも無視できない。また、科学的に確実な結論がでるまで待っているのは人力の及ばない危機に突入してしまう危険性もある。手遅れにならぬよう可能性を予測することが重要である。太陽活動による地球温暖化の問題は桜井の研究¹⁾を境に新段階に入ったものとする。

(先事館先事研究所)

参考文献

- 1) Sakurai T., Earth Planet Space, 54, 153-157, 2002.
- 2) Svensmark H., Friis-Christensen E. J., Atm. Sol.-Terr. Phys. 59, 1225-1232, 1997.
- 3) Parker E. N., Nature, 399, 416-417, 1999.
- 4) Bone N., The AURORA, 2nd ed. (John Wiley & Sons, New York) 116-117, 1996
- 5) Walker M., Publ. Astr. Soc. Pacific, 100, 496-506, 1988
- 6) Unno W., Shibahashi H., Yuasa M., unpublished (submitted to PASJ)
- 7) Unno W., Shibahashi H., Proc. D. Gough Memorial Sympos. in press.

内田 豊 君を偲ぶ

加藤正二

内田 豊君の突然の悲報に接し言葉もない。8月26日、何か重要なメールが来ているような気がして、夕方出先から勤務している大学までわざわざ出向いた。というのは、携帯していたノートパソコンが故障して、全く陸の孤島にいる状態がしばらく続いていたからである。葬儀に出られず残念であった。

内田豊君とは50年近くにわたる長いつき合いであり、共に天文学を志して切磋琢磨してきた仲であった。特に互いに若く、将来の天文学を熱っぽく語り合った20代が深い思い出として心に焼き付いている。

私が最初に彼を知るようになった経緯は今でも鮮明に覚えている。東大教養の2年生のときである。当時は教養の2年の後半から専門に分かれることになっており、彼も私も物理学科の天文コースに進んだ。秋からは、物理学科の学生に対する講義、演習が理学部の建物近くのプレハブ教室で始まった。朝早く来なければ前の方に席を確保するのは困難であったので私はいつも後ろの方に座ることになった。秋も深まり、教室内は寒かったの

だと思う。多くの学生がオーバーを着て授業を受けていた。その中で、教壇から見て、右側の最前列にポケットの部分が破れかかった黒いマントを着た少し大人の感じのする学生がいつも座っていた。存在感のある学生であったのですぐに気が付いた。多分物理の学生だろうと思っていた。その後、コースに分かれて顔合わせをした時に、その学生が、その後50年近くにわたってつき合うこととなる内田君であった。その時に彼が「これからはお互い君やさんをつけないで名前だけで呼び合おう」と言ったのを覚えている。呼び捨てで名前を呼び合うことに慣れていなかった私は彼との約束を守れなかったが、今にして思えば彼に悪かったかなと思っている。

3年生になると、専門の科目も始まり、一緒に本郷と麻布の天文教室の間を往復することも多くなり、それに伴いつき合いも深くなった。今は、飯倉の都電の停留所で寒い中を都電を待っている間に交わした会話などが懐かしく思い出される。大学院に入ったのは、彼と私ともう一人船越君の3人であった。船越君はすぐに生化の大学院に進路を



Ile d'Yeu の古城にて、内田氏と J-C Pecker 氏

変えたので、その後同級生は2人だけとなった。

大学院では内田君は畑中先生につき、私は海野先生についた。彼は修士論文で太陽バースト、博士論文で衝撃波によるコロナの加熱に関する研究をそれぞれ纏めたが、いずれも指導教官に依存することなく独力で研究を進め論文に纏めた。学位をとった後も内田君と私は近い道を進んだ。1963年の秋から彼は畑中先生の紹介でプリンストンに、私は海野先生の紹介で、海野先生の友人の Spiegel のいるニューヨークにそれぞれ留学することになった。内田君はよくニューヨークの私のところに遊びに来てくれたものである。「ニューヨークにいる君よりも僕の方がニューヨークをよく知っている」と冗談を言う内田君とニューヨークの観光をした。また、車の運転もせず、引きこもっている私を気にかけてくれたのであろう、内田君は友達との遠方へのドライブに私をよく誘ってくれたものである。当時エールにおられた堀 源一郎さんのところに私を連れて行ってくれたのも内田君であった。また、内田君がいなければ近くにいながら私はナイヤガラの瀧も見ること無かったであろう。内田君は研究ばかりでなく、生活の面でも縦横に活躍していた。一方、この時期は内田君と研究のこと、

日本の天文学の将来のことなどについて最も深く話し合った時期でもあった。休日などは一日中語り合ったものである。二人とも若く、将来の日本の天文学を担わなければという思いに溢れていた。内田君は「君と話しをすると帰ってから英語がもとの状態に帰るのに一週間もかかる」と言っていたものである。

帰国後は、内田君は天文台勤務、私は天文学教室勤務、しかも研究の方向も少し離れたこともあってあまり会う機会が多くなかった。その後、1971年私が京都に移ったため、さらに会う機会は減ったが、学会や研究

会で会うたびに、いつも近況を話し合ったものである。研究面で互いに議論する事は少なくなったが、同級生としての内田君や優れた研究をしている研究者としての内田君には常に注目をして、研究の方向や手法には関心を持って見させて貰っていた。彼は太陽物理学から出発したが、磁場からんだ現象を通して、研究分野を恒星物理学、星間物理学、銀河物理学と広げ、常に新しい分野を開拓し、多くの後継者を養成した。前に述べたように、20代に彼とは将来の日本の天文学についてよく議論したが、彼は国際的に活躍し日本の天文学の地位を国際的に高められる人材が必要であると力説していた。彼は自らそれを実現したのみならず、国際協調、科学行政の面でも日本の天文学のためにリーダーシップを発揮した。

内田君は、この秋の学会発表でも若い研究者と共に名を連ねており、まだまだ研究を続け発展させていくつもりであったであろう。全く残念なことである。常に研究に意欲を持ち続けられた内田君に敬意を表したい。今後は、多くの若い人達が内田君の意志を継いで行かれることであろう。ご冥福をお祈りいたします。ご家族の皆様には心からお悔やみ申し上げます。